

教育上の課題と工夫

教育現場に多大な影響を及ぼしたコロナ禍という現象について、その功罪の洗い出しが行われるフェーズを迎えている。本稿では、筆者が科目を担当する社会学の運用を通して、コロナ禍で実感した課題とその課題に対する工夫、そしてその経験から得た学びを紹介する。

少人数の学生による対面ディスカッション形式の授業を理想としていた筆者にとって、文字通り「学生の顔が見えない」遠隔授業は物足りないものであった。昨年度の教育実践紀要に寄稿した「社会学オンライン・グループワークの課題と合理化の試み」は、その物足りなさを埋めるべく試行錯誤した結果と言える。この時から始めたグループ単位でのレポートは、授業が対面に戻った現在でも続けている。個人からのフィードバックにそれぞれ目を通し、その全てを授業に反映していた頃に比べて、授業の準備時間に費やす時間が短くなり、グループワークは学生間のディスカッション促進にも寄与している。

2020年度初頭のメールを辿ると、関係各所からのコロナに関する情報や指示に随分振り回されていたことが分かる。業務停止命令下では、それまで当たり前に行っていた対面授業ができなくなり、利用可能なツールで最大限の効用を得る方法を模索した。遠隔ツールの中で、最も効力を発揮したのは Zoom であろう。本学でも多くの教員が OJT の形で遠隔授業運用のためにこのツールを取り入れていった。今年度の社会学の授業は全面的に対面形式に戻すことができたが、コロナ禍の Zoom 運用の経験が思わぬ所で役に立った。台風 2 号の接近により業務停止となる中、6 月 1 日の授業を Zoom で録画し、オンデマンドで配信することができたのである。この対応は、Zoom というツールの存在、そしてそのツールを運用した経験があってこそ可能となった。

コロナ禍の功罪の「功」に焦点を当てるのであれば、業務の仕分け、つまり「やらなくていい」ことの洗い出しであろう。上記の例を参照すると、学生個人からのフィードバック集めはこの範疇に収まる。また、対面授業が行えない場合、対面の補講授業を「やらなくていい」という選択肢はありがたい。今後の教育現場で必要なのは、コロナ禍前に戻す努力ではなく、「やらなくていい」ことの検証から生み出される余力を「やりたい」ことに傾ける努力である。

コロナ禍の教育活動を振り返って

コロナ禍は、筆者が持つ教育に対する理想やこだわり、教育哲学といったものを見直すきっかけとなった。特に、少人数での対面授業を唯一の理想形と考えていた自分にとって、それ以外の選択肢の中から最善の策を模索する経験を得られたことは大きな収穫であった。対面授業が可能となった現在でも、時間割によっては学生から「Zoom にしてください」という要望の声を聞くこともある。このように、コロナ禍でもたらされた教員にとっての選択肢の広がり、学生にとっての選択肢の広がりでもあると言える。教員としてどうしても「やりたい」ことは妥協せず、それでも学生の要望も取り入れながら、最大限の教育効果が得られる方法をこれからも模索していきたい。
